

第1440回 (10月24日)

西ジャワ・天水田地域における畑作物 の役割

川 越 俊 彦・藤 田 幸 一

本報告は、ESCAP CGPRT センターが実施した研究プロジェクト、「インドネシア、天水田地域における畑作物の雇用・所得創出効果に関する経済研究」の成果の一部である。

調査は、1989年1～8月に渡って、西ジャワ、マジヤレンカ県の一天水田村において実施された。同県はジャワ島北岸の丘陵地帯に位置しており、西ジャワにおける主要な大豆産地の一つである。その中西部にある調査村は、天水田と畑地が複雑に混在した典型的な西ジャワの天水田村であり、農業が主要な産業であって、天水田では雨期(10～2月)に水稻、乾期(3～9月)に大豆が作付けられ、畑地には雨期に陸稲・とうもろこし・キャッサバの間作、乾期に大豆が作付けされるのが一般的であるが、近年、野菜の作付けが増加している。

今回の調査では、農家の作物の選択とそれが農家の就業構造(農業生産における労働の配置のみならず農外就業を含む)や村内・外の労働慣行に及ぼす影響、更に各作物毎の雇用吸収力の解明等を中心に分析を行なった。

1. 農業生産における雇用と所得の構造

調査村では生物化学的技術は比較的普及している一方、機械化は著しく遅れている。天水田の1 ha 当たり年間労働投入量は2,420時間であるが、畑地の労働投入量は、野菜以外の場合で水田の70～80%、労働集約的な野菜作の場合で3倍以上となっている。村では交換労働はほとんどなく、家族労働以外は雇用労働を雇う。雇用労働比率には作物間の差異が大きい。水稻作で62%、水田裏作の大豆で32%に対し、畑作では概ね15～20%である。

水稻の場合、男女のペアが事前に一定の面積を割り当てられ、その面積について田植と

収穫に責任をもつかわりに、収穫量の一定割合(調査時点では6分の1)を賃金として受け取る制度(チュプロカン)が確立しており、また大豆についても脱穀・風選作業に類似の制度があるが、他の作物には見られない。こうした雇用労働の供給源は、同一集落のさらに同一隣組の者が大部分を占めている。その他には、耕起・整地作業の繁忙期に、20～30 km離れた他県の村から季節労働者が少数流入する程度である。

また、生産費構造を比較した結果、水田作の経営者余剰はほぼゼロで、付加価値が土地と労働にきれいに分配されているのに対し、野菜作の収益性は大きく、野菜以外の畑作の収益性は小さいことがわかった。

2. ポスト・ハーベストにおける雇用構造

同調査村は、世帯の約9割が農業に従事し、農業以外にめぼしい産業もない純農村といえるが、米・大豆作中心のA集落では、純然たる専業農家は4割程度にすぎず、その他はなんらかの農外就業を行なっている。そのうち最も一般的なのは農産物の流通業であり、特に野菜の卸売業に女性の進出が目ざましく、その雇用創出効果は大きいと思われる。これに対して米は粳のまま村外に移出されるため、村内に追加的雇用機会がもたらされる余地は小さい。他方、野菜作中心のB集落では、継続的に行なわれる収穫作業等、野菜作が極めて労働集約的であり、多くの家族労働が必要とされるため、専業農家は農家世帯の75%を占めており、A集落のそれと好対照をなしている。